

# 近世日本語における「一的」の用法の成立

—中国俗語文学の影響を中心に—

金嘯泳\*

---

---

## <目次>

---

---

- |           |                      |
|-----------|----------------------|
| 1. はじめに   | 3. 「一的」における中国俗語文学の影響 |
| 2. 研究の枠組み | 4. おわりに              |
- 

**Key Word** : 的, 漢語, 接尾辞, 中国俗語文学, 白話小説, 白話語彙, 近世漢語, 漢語系接尾辞

## 1. はじめに

「一的」は、多くの先行研究によると、白話小説など中国俗語文学の影響によって近世末期から日本語に現れ始め、近代における西洋の文献の翻訳書などの影響で多く使われるようになったとされている。本稿では、先行研究を踏まえて、近世日本の「一的」の用法を中国俗語文学の用法と比較し、その影響と変遷過程を整理する。そうすることによって、中国俗語文学の用法がどのように近世の「一的」の用法までに繋がったかが明らかになると考えられる。

---

\* 高麗大学校・言語情報研究所, 研究教授, 日本語学・語彙論

## 2. 研究の枠組み

### 2.1 先行研究及び問題提起

これまで漢語系接尾辞「-的」に関する研究は多く行われてきたが、その中でも最も多く行われた研究は「-的」の起源及び受容に関する研究<sup>1)</sup>であった。その中で前田(1960:80)は具体的な用例を引いて、「-的」の起源は近世における中国俗語文学の影響であると述べた。また、山田(1961)は近代(明治)の新聞・雑誌などの資料から「-的」の用例をあげ、発生期における「-的」に関して述べている。山田は近代における「-的」の用法をまず、中国俗語文学の用法と現代語的な用法に大きく二分した。さらに前者には、中国俗語文学で行われている用法と同様であって、現代語には全然影響を与えてない用法(e.g. <sup>ナガイネエ</sup>座長的(用言の終止用法)山田1961:242)と、そうではない用法(e.g. <sup>どきてき</sup>土佐的(体言を構成)山田1961:243)、徐々の(連用修飾)山田1961:245)があと述べた。

以上のような先行研究によると、近世末・近代日本語の「-的」の用法には、中国俗語文学の影響が存在していたことがまず確認できる。それに、時期別に「-的」の用法において何らかの変遷があった可能性も窺える。

そこで朱柏智(1991)は、江戸末期の文献調査を通じて、近世の「-的」には名詞的用法(e.g. 中年的)と副詞的用法(e.g. 遠々の)のみが存在したと述べて、近世末期における「-的」の用法の分類を試みた。また、李長波(2006)は、先行研究における「-的」の用法、また江戸時代と明治期の文献の「-的」の用法における調査を行い、時期別「-的」の用法の特徴をまとめた。一方、楊超時(2009)は、従来の日中語彙交流史に関する研究が主に文法的な側面に偏っていて、「-的」を中心に考察を行った研究があまり行われた点を指摘しながら、中国語と日本語の「-的」における影響関係を主に中国語の立場から考察を行った。

1) 磯邊彌一郎(1906)、前田勇(1960)、山田巖(1961)、広田栄太郎(1969)、堀口和吉(1992)など。

稿者は、以上のような先行研究を踏まえて、近世末における「一的」の用法が中国俗語文学のどの用法の影響を受けて成立し、その用法がいかなる変遷過程を経てさらに近代日本語における「一的」の用法に受け継がれたかに関して統語論的に考察を行う。具体的には、近世末にどのような「一的」の用法が発生して、その中で何が退化して何が残存したか、またどのような用法がさらに新しく発生したかなどが問題になると思われる。

## 2.2 分析方法

先行研究のように、中国俗語文学における「一的」の用法が近世・近代日本語における「一的」の発生に直接的な影響を及ぼしたと前提すると、その具体的な様相を把握するにはまず、日本語の立場における中国俗語文学の「一的」の用法に対する認識・解釈が何より重要であると稿者は判断する。従って本稿では、まず近世・近代日本語にみえる実際の「一的」の用法における形態論的・統語論的な分類基準を中国俗語文学に投影させて、近世において中国俗語文学の「一的」をどのように認識・解釈したかに関して考察を行う。続いて、中国俗語文学における「一的」の用法がいかなるものであって、またその影響によって導入された「一的」はどのように変遷していたか通時的に考察する。ちなみに、近世の「一的」の用法を中国俗語文学の用法と比較するに際して、比較する対象におけるそれぞれの「一的」の用法を形態論的・統語論的に分類しなおすが、その基準は次のようである。

本稿では、(1)のように「一的」の語構成、つまり前部要素である語基における形態論的な考察に加え、(2)のように「一的」の後部要素である「一的」の用法とその形式を細かい基準に従って分類して考察を行う。まず、「一的」の用法を統語論的に「装定」「述定」「その他」に分類し、さらに文の中での意味と機能によって「装定」「連用用法」「連体用法」に分類した。

### (1) 「一的」の語基における形態論的な分類

- |             |         |        |
|-------------|---------|--------|
| a. 品詞：1) 体言 | 2) 用言   | 3) その他 |
| b. 単位：1) 語  | 2) 連語・句 | 3) 文   |

(2) 「-的」の用法における統語論的な分類

- a. 装定用法：1) 連用用法            2) 連体用法
- b. 述定用法
- c. その他

このような考察によって、発生期の「-的」の用法における中国俗語文学による影響を考察することが可能になると判断するものである。

### 3. 「-的」における中国俗語文学の影響

#### 3.1 中国俗語文学における「-的」の用法

本稿では、近世日本語における「-的」の用法を形態論的・統語論的に考察するが、中国語の「的」<sup>2)</sup>は、「…中国で最初は実詞として使われ、徐々に「低」と「地」を交代して虚辞の用法ができ、その意味と文法範囲が広くなり、近代に至って、俗語文学に主に虚辞として使われるようになった(陳誼1999：338)」と言われている。

まず、楊超時(2009)は清末の白話小説<sup>3)</sup>で見られる「的」の用法を以下の(3)のように述べた。

- (3) a. 名詞の後ろに付き、所有を表すもの。
- b. 種々の品詞や句の後ろに付いて、連体修飾語となるもの。
- c. 形容詞や副詞の後ろに付いて、連用修飾語となるもの。
- d. “地”のかわりに使う用法である。
- e. “的”構造<sup>4)</sup>になって、前の中心語を体言化するもの。楊超時(2009：135)

---

2) 本稿における「-的」は、「語基」或いは「語基」に該当するもの(全部要素)＋「的」という形式を持つ語を意味する。詳しくは、本稿の凡例を参照。

3) 『新中国未来記』『官場現形記』『二十年目睹之怪現狀』『老殘遊記』の四点における「-的」の用法(楊超時2009：133-135)。

4) 楊超時(2009)における「的”構造」は「語基」或いは「語基」にあたるもの＋「的」という構造を示し、本論文の「-的」に該当する。

そこで、以上の(3)のような白話小説における「的」の用法を統語論的に分類しなおすが、その前に(3)dのような中国語の「地」と「的」の関係に関する記述に少し言及してから論を進めたい。中国語における「的」は、前述したように、元来(唐代以前)は具体的な意味を持ち、実詞として使われて、助詞の「的」とは繋がりが少ない。助詞としての「的」の前身は「底」と「地」だと思われる。「之」か「者」は最初「地」と「底」に変化して、後に「的」に変化したがる、その起源及び用法に関する記述は以下の(4)のようである(陳誼1999: 334-335)。

- (4) 今凡言之者、音變如丁慈切、俗或作的。… 今人言底言的、凡有三義… 在語中者、的即之字 … 在語末者、若有所指、如云冷的、熱的、的即者字。  
(今日「之」というものに、丁慈切音のように発音の変化が起こり、俗は「的」となる場合がある。… 今日人々が「底」「的」と言うのは、凡て三義あり、語中にあうものなら、「的」は「之」であり、語末にあるものなら、若し指すものがあれば、例えば「冷的」「熱的」と言えば、「的」は「者」である。)

**凡例** 上記の和訳は、陳誼(1999)による訳文のママ。『新方言』章太炎(陳誼1999: 334)

以上のような記述を考慮し、(3)のような中国俗語文学における「一的」の用法を統語論的にまとめると、以下の(5)のように、大きく二つの用法、装定用法(連体・連用用法)とその他の用法(名詞用法)に分類できる。

- (5) a. (4)a・b・d → **装定・連体用法**  
b. (4)c・d → **装定・連用用法**  
c. (4)e・d → **その他・名詞用法**

そこでさらに、諸橋轍次『大漢和辞典』が説く中国俗語文学における「的」の用法をあげると、以下の(6)のようになる。

- (6) **[的助辭]** 俗語で、名詞・動詞・形容詞・副詞に添へて用ひる。宋の語録などに低地などを用ひるものに同じ。  
a. 形容詞に添へる助辭「もの」。貴的(貴いもの)  
b. 接続の助辭「の」。  
c. 所有をあらわす助辭「の」。低とも書く。我的書(私の本)

- d. 動詞・形容詞を名詞に變ずる助辭。得とも書く。走的快(歩くことが速い)
  - e. 人をいふ意に用ひる。送信的(郵便配達夫)
  - f. 了に同じく過去の時を示す助辭。畢的學(卒業した)
  - g. 副詞に添へる助辭「に」。地とも書く。一直的(まっすぐに)
  - h. 動詞の下について受身の意をあらわす助辭。兒子死的(子に死なれた)
- 『大漢和辭典』修訂版(1999)

以上の(6)の記述は、中国俗語文学の「-的」の用法を端的に示すものだと  
思われるが、例えば(6)a・d・eの場合、上記の(3)eと(5)cのように、「-的」の  
他の用法・名詞用法にあたと考えられる。そこで、(6)の記述も(5)のよう  
に統語論的に分類できると思われるが、それに関しては、以下の(7)のよう  
な堀口(1992)の記述が詳しい。

- (7) (6)a-eはこのように並べられているが、(6)b・cの連体用法のものが基本であ  
り、その下の名詞を省略した用法として(6)a・e・dがあるというべきではなかろ  
うか。外に(6)gの連用用法があり、別に(6)f・hの動詞などに付く用法があるわ  
けである。

**凡例**(6)a-dのような番号・記号は稿者によって、本論文の記述に合わせたものである。  
堀口(1992:62)

一方、陳誼(1999)は主に「-的」の語構成(語基+的)という形態論的な側面  
に注目し、唐代から明・清時代までの助詞としての「-的」の語基をまとめた  
が、稿者はその用例もまた統語論的に分類しなおした。詳しくは、以下の(8)  
のようになる。

#### (8) [中国俗語文学における助詞「-的」の用例]

##### a. 装定・連体用法

- 1) 孔夫子是春秋世儒道的宗師，要扶持這三綱五常。  
『秦並六国平話』卷上，元代
- 2) … 可喜殺睡足的西施 … 清潔殺避暑的西施 …  
馬致遠『湘妃怨・和盧疎齋《西湖》』元代
- 3) 聽塞鴻，啞啞的飛過暮雲重。金・董解元『廂記諸宮調』卷三，金・南宋代

- 4) 小人只認得一個是本鄉中教学的先生，叫作吳学究。  
容與堂本『水滸伝』第十八回，明代

**b. 装定・連用用法**

- 1) 看見員外須眉皓白，暗暗的叫好。 京本通俗小説『志誠張主管』宋代  
2) 只見那妻子張婦淚戴戴的下。 『五代史平話』宋代か元代  
3) 輕輕的飛動，把壳花人扇過橋東。 王和卿『醉中天・詠大胡蝶』元代  
4) 約到子時前後，輕輕的起来，穿了衣服 ……。 『西遊記』第二回，明代

**c. その他・名詞用法**

- 1) 将那姓花名約的拿了。 『宣和遺事・元集・宣和四年』北宋  
2) 又水軍從中流爾下，唐兵戰死的，溺死的，及降的，着了四万余人。  
『五代史平話』周史下，宋代か元代  
3) 将那姓花名約的拿了。 『宣和遺事・元集・宣和四年』北宋

**d. 動詞の過去助詞**

- 1) 這睡的是誰？ 『小孫屠劇文』宋代  
2) 去那小二臉上只一掌，打的那小二口中吐血。  
容與堂本『水滸伝』第三回，明代

**e. 動詞や形容詞の結果・程度助詞**

- 1) 怎○幾日不見，就瘦的這樣了。 『紅樓夢』第十一回，清代

以上の(5)と(6)，また(7)のような堀口(1992)の記述と(8)の用例を総合し、中国俗語文学における「一的」の用法を統語論的にまとめると、大きく六つに分類できると思われるが、詳しくは以下の(9)ようになる。

**(9) [中国俗語文学における助詞「一的」の用法]**

- a. 装定・連体用法：(3)a・b・d, (6)b・c, (8)a  
b. 装定・連用用法：(3)c・d, (6)g, (8)b  
c. その他・名詞用法：(3)e・d, (6)a・d・e, (8)c  
d. 動詞の過去助詞：(6)f, (8)d  
e. 動詞の受身助詞：(6)h  
f. 動詞や形容詞の結果・程度助詞：(8)e

引き続き、以上のような中国俗語文学の「一的」の用法における統語論的な考察に加えて、その形態論的な側面を考察することにする。まず、前述した

(3)のような記述における「一的」の前接語、つまり前部要素(以下、語基)の語構成はいかなるものであったらうか。中国俗語文学における「一的」の語基は、(3)の記述によると、主に名詞・形容詞・副詞があげられるが、その同時に様々な品詞に対応しているとも言われている。例えば、『新中国未来期』<sup>5)</sup>にみえる「一的」の語基には、名詞・動詞・形容詞・副詞・連語或は句があげられる。また、唐代から明・清時代までの助詞としての「一的」の語基をまとめた陳誼(1999)によると、副詞・形容詞・名詞及び代名詞・動詞が「一的」の語基としてあげられている。一方、(6)の『大漢和辞典』の記述によると、名詞・動詞・形容詞・副詞が「一的」の語基としてあげられる。それらの記述をまとめると以下の(10)のようになる。

(10) a. 中国俗語文学の「一的」の語基の品詞

- 1) 体言：名詞・代名詞
- 2) 用言：形容詞・動詞・副詞

b. 中国俗語文学の「一的」の語基の単位

- 1) 語
- 2) 連語・句

以上のように、中国俗語文学の「的」は(10)のような多様な語基を以って「一的」を構成して、文においては(9)のような意味と機能をはたしていたことが確認できた。それでは、そのような中国俗語文学の「一的」の用法は近世日本語にどのような影響を及ぼしたのであろうか。

### 3.2 近世日本における「一的」

#### 3.2.1 近世日本における中国俗語文学の「一的」に対する認識・解釈

本稿では、先行研究を踏まえ、日本の近世末期における様々な文献の「一的」の用法を調査し、中国俗語文学による影響を考察する。まず、当時の「一的」に対する認識或は解釈に関して少し触れてから論を進めたい。以下の(11)は、順番に『訂校・訓譯示蒙』『俗語解』『助語審象』における中国俗語文学にお

---

5) 『新中国未来期』梁啓超(1902)



ける「一的」に関する記述である。

- (11) a. 「低」的「地」ハ三字トモニ、①物ヲ指ス辭ナリ。倭語ニ、カウノシタノデゴザル、カウノアルノヲナニノトシテトイフ、此ノ②「ノ」ハ仮名ニ、アタルナリ。③雅語ノ、「者」ノ字ト相似タリ。此ノ三字、元来一字ナリ。

cf. 『譯文筌蹄初編』正徳5年(1715)には該当の箇所がなく、『譯文筌蹄後編』卷五における記述に同義の文章がある。

『訂校・訓譯示蒙』明治14年(1881)卷五29・オ

- b. 俗語、何…的…ト使フコト。陶冕曰、低ヨリ地ヘ転シ、地ヨリ的ヘ転スルモノナリ、低地的ノ三字一義ナリト。余按スルニ又見的怪的ナリ的ハ得ノ字ノ意ナリ。見得リ怪得リノ義トシテヨクスムナリ。又老的少的這樣的解事のナト的ハ者ノ字ノ心エテヨクスムナリ。白駒云、訳ヒロシ①句ノ中間ニ有トキハ之字ノ心ナリ②句脚ニ有トキハ者ノ字ノ心ナリ又指辭アリ設ル辭アリ③助字ニアルトキアリトテモト訳ス語勢ヲ以テ訳スルナリ。

『俗語解』宝暦13年(1763)・第三冊(自ソ至テ)・テノ部

『唐話辭書類集』昭和49年(1974)、第10集434頁

- c. 「俗語助字」コノ下ニ載ル所ノ助字ハ、小説俗語ノ字ニテ、雅文ニ入ベカラズ。勿論皆出処アレトモ、小説ノコトナレハ、擧引スルニ及ハズ。只二三ノ熟語ヲ録シ、俗語ヲ附シテ、初學ニ示ス。

『助語審象』文化14年(1817)卷下45・オ

**的** マサニ ダト訳ス：①成精的バケモノノダ、組齒的ラチモナイ、老實的リチギ、有的アリタケ、②朧月賛的キタナヒモノノダ、出名的ゼンセイ、呬呀欵乃的シツシシアノ、流水的スラノ、……

『助語審象』文化14年(1817)卷下43・ウ

近世日本における「一的」の用法に対する認識及び解釈は、まず(11)a『訂校・訓譯示蒙』の記述によると、統語論的に①「物ヲ指ス辭ナリ」・③「雅語ノ「者」ノ字ト相似タリ」と②「ノ」ハ仮名ニ、アタル」のように二分することができる。それはつまり、近世期に、中国俗語文学の「一的」の用法には①・③(9)cその他・名詞用法と②(9)a装定・連体用法のような意味と機能があると解釈していた事を意味する。

続いて、(11)bであるが、堀口(1992)はその記述に対して、「-的」のすべての用法を網羅しようとしたものであると述べ、また、その意味を明らかに示すのは「句ノ中間ニアルトキ」すなわち連体用法のものと、「句脚ニアルトキ」すなわちその下にあるはずの名詞を言わない用法のものである」と述べた。つまり、(11)aと同様に分析すると、『俗語解』では「-的」の用法を、①(9)a装定・連体用法と②(9)cその他・名詞用法としてとらえていることが分かる。ちなみに、堀口は「トテモト訳ス」は良く分からないと述べたが、おそらくこれは副詞的な用法で③(9)b装定・連用用法にあたりと稿者は判断する。

最後に(11)cであるが、「-的」を「ダト訳ス」と記述して、多数の用例をあげている。その用例に対して堀口は、「「ダト訳ス」と言いつつその訳例は二つしか掲げないが、それらは文末に用いたものであり、その「~モノダ」という「ダ」を「的」の意と解したのである(堀口1992:63)」と述べている。つまり、その記述における二つの訳例は、おそらく①「成精的バケモノダ」と②「朧月賛的キタナヒモノダ」の用例を指すもので、堀口は二つの用例のみが「ダト訳ス」用法だと判断していると考えられる。しかし稿者は、(11)cの二つの用例の「-的」自体は、むしろ(6)dの「動詞・形容詞を名詞に變ずる助辭」のような用法だという解釈が妥当で、(9)cその他・名詞用法に当たると判断する。なぜなら、「的」が「~ダ」だと仮定して、「~モノダ」から「的」の意である「~ダ」を分離すると、残された「~モノ」という意はそもそも語基(成精、朧月賛)の中に内在していなければならなくなる。しかし、例えば「成精」は動詞で、「(妖怪などに)化ける」という意を持ち、「~モノ」という意は含まれていない。ちなみに、もし「成精」が名詞だとすると、それに付く「的」は自然に(6)bの「接續の助詞「の」」或は(6)cの「所有の助詞「の」」になり、「成精的」の後部に被修飾語が必要とされるので、そのような仮定は有効ではない。つまり、「成精的バケモノダ」のような(11)cの「-的」の用法は、「動詞+的」という語構成を持ち、(9)cその他・名詞用法の意味機能を表す用法であると判断できる。但し、そのような「-的」の用法が、文末におかれたりして終止用法を表す場合には、「-的(e.g. モノ)に「~ダ」が追加されて「~モノダ」のようになり、述定用法(e.g. 「彼の態度は客觀的だ」「彼の態度を客觀的(た)と判断する」「彼

の態度は客観的にして、且つ公正的であった」として認識・解釈されたと考えられる。言いかえると、(11)cの記述は、「一的」自体の用法(その他・名詞用法)に加えて、その文における統語論的な機能(述定用法)も「一的」の用法として認識・解釈していたことを表すと判断する。よって、①成精的バケモノダと②朧月賛的キタナヒモノダ以外の用法(組齒的ラチモナイ、老實的リチギ等)も自然に、以下の(12)a・bのように、述定用法として認識・解釈されていたと判断する。

- (12) a. 組齒的ラチモナイ、老實的リチギ、呬呀欵乃的シツシシア / \  
 cf. 彼の態度は積極的(ダ)。  
 b. 流水的スラ / \ト  
 cf. 彼の態度は積極的(ダ)ト判断する。  
 c. 「成精的バケモノダ」、朧月賛的キタナヒモノダ  
 cf. 彼は取的ダ。 **凡例** 取的は、下級の力士の意<sup>6)</sup>。

そこでさらに稿者は、時期も後の近代になる上で、日本人による漢文である点で特殊ではあるが、以下の(13)のような用例に注目する必要があると考える。(13)の「恁般的」における「的」のように、(9)dの動詞の過去の用法が文末におかれて終止用法として使われる場合、(11)cと(12)a・bと同様、述定用法(「~デシタ」として認識・解釈されたことを示唆するものである。それはまた、先に述べたように、中国俗語文学における「一的」の用法が日本語に輸入されるに際して、「一的」自体の意味のみならず、文における統語論的な意味も合わせて認識・解釈されていた可能性を示唆するものである。

- (13) … 虎-兕道<sup>7)</sup>、那後ハ恁般的(アノアトハドウデシタ)  
 『新橋雑記』第一編、松本万年、明治11年(1878)

ところが、以上のように(11)の記述を考察するに際して次のような点を念頭におく必要がある。それは、近世日本において中国俗語文学の「一的」の用

6) 『日本国語大辞典』第2版(2001)

法は、堀口(1992)も指摘したように、(11)bの「語勢 ヲ以テ訳スルナリ」をみると、当時は「一的」の意味機能を把握するのが容易ではなかったことが推測できる点である。また、少し後の記述であるが、以下の(14)のような『復軒雜纂』の記述を参考にすると、「一的」に「あっても無くてもよい字」とあり、「的」の意味の解釈が決して定かではなかったことが分かる。

- (14) … 八品詞の何の類とも名づけることが出来ぬ、どんな字の尻にもつける、とある。例へば、名詞には、「喫二蘿蔔的一」など何にでもつける。形容詞の姿なのは、「這樣的東西不レ多」「非二巧手的一、不レ能畫這樣的一」「布的材料」「人的手」「最大的人」など用ひ、動詞には、「學生講的時候」講的不レ錯、「生二の許多子孫一」「這匹馬、走的快」「草、長的快」副詞には「快々の走ル」、「悄悄的送二給他一」「經々の打レ他」「海裡二的沙多」など用ひてあつて、ツマリ、あつても無くてもよい字で、決して「様」、「上」、「風」、「然」などの意味は無い。 大槻文彦『復軒雜纂』明治35年(1902)

そのような近代当時「一的」に関する不完全な理解は、中国語と日本語の両言語において文法体系や語彙における相違があるが故に当然な現象であると考えられる。それは自然に、(11)cの述定用法の「一的」の用法に対する日本特有の認識・解釈或は新用法の発生に繋がったと考えられる。その例として、前述した「一的」の述定用法としての認識・解釈に加えて、3.2.2節で詳しく述べることにするが、和文における仮名による文法表示の補完、また「一的」のその他・名詞用法における「的」の語性的変化などがあげられる。

以上のような記述をまとめ、(9)中国俗語文学における「一的」の用法とそれに対する近代日本における認識・解釈を比較すると、以下の(15)のようになる。

- (15) [近世日本における中国俗語文学の助詞「一的」の用法に対する認識・解釈]  
 [中国俗語文学] → [近世日本における認識・解釈]  
 a. (9)aと同様 → 装定・連体用法[~ノ] : (11)a②, (11)b①

- b. (9)bと同様 → **装定・連用用法[~ニ]** : (11)b③
- c. (9)cと同様 → **その他・名詞用法[~モノ]** : (11)a①, (11)b②
- d. (9)c・d・e・fなどの**終止用法** → **述定用法[~ダ]** : (11)c

つまり、近世日本では、実際の(9)の中国俗語文学のような「-的」自体の用法に加えて、文における統語論的な側面での「-的」の意味、或は機能も、もう一つの用法として認識・解釈していたことが分かる((11)cの①・②、(13)参照)。例えば、日本語に適応しにくい異質的な用法((9)d動詞の過去助詞、(9)e動詞の受身助詞、(9)f動詞や形容詞の結果・程度助詞)や、その他・名詞用法((9)その他・名詞用法)も、文において終止用法であれば、(15)d述定用法として認識・解釈していたことである。稿者はそのような認識・解釈こそが、近世以後の「-的」の用法派生の土台になったと判断する。

ところで、2.1節で少し言及したように、山田(1961)は、近代における以下の(16)のような「-的」の用法は中国俗語文学で行われている用法と同様で、現代語には全然影響を与えてないと述べた。しかし、以下の(16)の「-的」の用法は、近世・近代はもちろん、現代日本語にも多く見られる用法(述定用法, e.g. 彼の性格は積極的(だ))であって、元をたどると中国俗語文学の「-的」の用法における(15)dのような認識・解釈の影響によるものだと判断し、稿者は山田(1961)とは見解を異にする。

- (16) a. 妓們相顧ミテ道<sup>7</sup>, 那ノ客へ毎(イツモ)謙坐長的(ナガイネエ)
- b. 班兒道<sup>7</sup>, 真箇不忍住的(マコトニタマラナイネ), 虎-兒道<sup>7</sup>, 那後ハ恁般的(アノアトハドウデシタ)
- c. 妓揖一揖答道<sup>7</sup>, 妙法樣的(デス),  
『新橋雜記』第一編, 松本万年, 明治11年(1878) (山田1961:242)

### 3.2.2 近世日本における「-的」の用法

次に、(15)のような中国俗語文学の「-的」の用法における認識・解釈を念頭において、近世における実際の用例を調査し、「-的」の用法がどのように

日本語に輸入されたかに関して考察を行うことにする。

「-的」の用法が見られる近世の資料には主に、①中国俗語文及びその訓読資料と②中国俗語の和文翻訳及び一般和文資料(以下、近世和文)があげられるが、まず、中国俗語文及びその訓読の場合、以下の(17)~(20)のような『小説奇言』<sup>7)</sup>の用例が見られる。

- (17) a. 不<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>下(イトマゴヒセズ)這些<sup>レ</sup>求<sub>レ</sub>上<sub>二</sub>詩畫<sup>ヲ</sup>的<sup>ノ</sup>朋友<sub>上</sub> (一・四・オ)  
 b. 進<sub>二</sub>了城<sub>一</sub>, 到<sub>レ</sub>二邦<sup>リ</sup>熱鬧(ニギヤカナル)的<sup>ノ</sup>所在<sub>一</sub>(トコロ), (一・四・オ)  
 c. 六十來(バカリ)歲<sup>的</sup>ノ老兒, (二・二・ウ)  
 d. 邦<sup>ノ</sup>老兒把<sub>テ</sub>身上<sup>的</sup>雪兒<sup>ヲ</sup>抖<sup>フル</sup>淨<sup>メ</sup>, (二・二・ウ)  
 e. 豈是老漢<sup>的</sup>の本念<sup>ナランヤ</sup>。 (二・15・オ)
- (18) a. 邦<sup>ノ</sup>人撲<sup>的</sup>(ハタト)一交<sup>シ</sup>(フミチガヘ), 跌<sup>テ</sup>(コケ)在<sub>二</sub>雪裏<sub>一</sub> (二・二・ウ)  
 b. 只得(センカタナク)慢慢<sup>的</sup>(ソロ / \ト)捱<sup>シ</sup>去<sub>テ</sub>罷了 (二・三・ウ)  
 c. 把<sub>レ</sub>被<sup>ヲ</sup>(フトン)没頭没腦<sup>的</sup>(スツボンカブリニ)蓋下<sup>ス</sup>。 (二・九・ウ)
- (19) a. 是勸<sub>二</sub>人家弟兄(ケフダイ)和睦<sup>的</sup>ナリ。 (三・1・オ)  
 b. 至愛的, 莫<sup>カハ</sup>如<sub>二</sub>二夫婦<sub>一</sub>, 白頭相守, 極<sup>テ</sup>是長久<sup>的</sup>ナリ。 (三・2・オ)
- (20) a. 香燭之類<sup>モ</sup>, 也<sup>タ</sup>要<sup>レ</sup>スル備<sup>シ</sup>的(モノナリ) (一・3・ウ)  
 b. 凡來<sup>テ</sup>喫<sup>レスル</sup>酒<sup>的</sup>(モノ), 偶然(タマ / \)身邊銀錢缺少, <sup>ナルトキハ</sup> (二・1・ウ)  
 c. 誰知<sup>レ</sup>倪善繼與<sub>二</sub>做爹<sup>的</sup>(オヤタルモノ), (三・8・オ)  
 d. 親族中<sup>ノ</sup>年長知<sup>レ</sup>事<sup>的</sup>(コトナレタルモノ), 準備<sup>シ</sup>上<sup>リ</sup>前<sup>シ</sup>見<sup>レ</sup>官<sup>ニ</sup>。 (三・24・ウ)  
 e. … 即使(タトヒ)萬金<sup>ナリトモ</sup>, 亦是兄弟<sup>的</sup>ナリ(ヲト / \ガモノ) (三・27・ウ)

**凡例** 上記の(17)~(20)における左ルビは括弧表記。

堀口(1992:60)は、以下の(21)の理由をあげて、以上の(17)~(20)のような中国俗語文における「-的」はそのまま「~テキ」と読まれたと推定できると述べた。

- (21) a. (17)のような(11)b句中用法<sup>8)</sup>の場合、付された「ノ・カ」が振り仮名の位置

7) 『小説三言』(1976) : 『小説奇言』宝暦3年(1753)

ではなく、送り仮名の位置である。

- b. (19)と(20)のような(12)b句脚用法<sup>9)</sup>の場合、振り仮名は見られない(まれに「モノ」だけが左訓で付されている)。

以上のような、近世における中国俗語文学の「一的」の用法と、その用法の訓読・和文翻訳における影響関係をまとめると、次のようである。

まず、(9)と(10)のような中国俗語文学の「一的」は、近世日本において3.2.1節の(11)のように認識・解釈されていたが、基本的にその解釈が容易ではなかった。よって、この定かではない「一的」の意味機能を明らかにするために、中国俗語文学の「一的」を訓読・翻訳するに際して「的」に「仮名」を付けた。例えば、a) 装定・連体用法には(17)のように“ノ・カ”を、b) 装定・連用用法には(18)のように“ニ”を付した。また、c) 終止用法である「一的」には、「一的」自体の用法とは別に、(19)(20)dのように“ナリ”を付したりして、述定用法であることを表した。最後に、d) その他・名詞用法には(20)のようにまれに左訓に“モノ”を付した。

このような中国俗語文及びその訓読資料における仮名は、「的」の事実上の文法表示の機能を担うことになったと考えられる。つまり、そのような近世日本の俗語文及びその訓読の影響を受け、後に近世・近代和文における「一的」の用法が確立されて行ったと推測できる。

それでは、近世和文における実際の「一的」の用法はいかなるものであろうか。まず、朱柏智(1991)は江戸末期の『通俗醒世恒言』における「一的」の用法を調査して、「当時における「的」の用法はすべて中国の俗語文学からきたもので、名詞的用法と副詞的用法しかなかったとも確実に言えよう(朱柏智1991:64)」と述べた(以下の(22)参照)。

(22) [江戸末期(『通俗醒世恒言』(寛政2年(1790))における「一的」]

- a. 名詞的用法：その人のこと或いはその職業をしている人を表す  
 - 中年的ハ(名詞)、我的ノ(代名詞)、幸的ヲ(人名)、猿テキで(名詞)、車力

8) (11)b句中用法：… 句中中間ニ有トキハ、之字ノ心ナリ、…『俗語解』、連体用法

9) (11)b句脚用法：… 句脚ニ有トキハ、者ノ字ノ心ナリ…『俗語解』、終止用法

テキハ(職業)等

- 1) 這中年的ハ便夫人ノ金氏 … 卷之二
  - 2) 我的<sup>ワレテキ</sup>ノ工錢<sup>コウセン</sup>ヲ得ル身ニ … 卷之三・下・25・オ
- b. 副詞的用法：ある物事の性格・性質或いはある動作が行われる状態を表す  
 - 遠々の<sup>トウトウ</sup>的ニ(副詞), 噓的<sup>ウセキ</sup>ニ(擬声語)など
- 1) 遠々の<sup>トウトウ</sup>ニ聞エシカ … 卷之三
  - 2) 噓的<sup>ウセキ</sup>ニ響キテ卓上ニ物落タリ 卷之四  
朱柏智(1991: 63・70)

一方, 堀口(1992)は, (22)の『通俗醒世恒言』(寛政2年(1790))に加え, 『通俗隋煬帝外史』(宝暦十年(1760))『通俗赤繩奇縁』(宝暦十一年(1761))における「-的」の用法を多数あげた。そこで稿者はその一部に『通俗醉菩提全伝』(宝暦9年(1759))の用例を加えて, (15)のように, 統語論的に分類し直した。すると, 以下の(23)のように, 近世和文には名詞的・副詞的用法以外に多様な「-的」の用法が存在していたことが確認できる。

(23) a. 装定・連体用法：「-的」ノ

- 1) 他們<sup>カレラ</sup>ミナ十六七歳ノ嬌怯々<sup>キヤウハテキ</sup>的(ヨハノシイ)ノ女子ナレバ, …  
『通俗隋煬帝外史』(1760)六・6・ウ
- 2) 往來門<sup>ワウライ</sup>ニ絶間<sup>タヘマ</sup>ナキヲ, 便出<sup>ベニシュツ</sup>名的<sup>メイテキ</sup>的(ゼンセイ)ノ姉妹<sup>シバイ</sup>トス …  
『通俗赤繩奇縁』(1761)一・9・ウ
- 3) 請<sup>コヒ</sup>テ酒肆<sup>サカヤ</sup>ニ至リ, 三杯<sup>サンイキツ</sup>ヲ喫シ, 你的<sup>ナンチテキ</sup>ノ意<sup>イ</sup>ヲ見スベシ。  
『通俗醒世恒言』(1790)四・4・ウ
- 4) 不三不四(ウシロクラキ)的<sup>フサンフシ</sup>ノ毛病<sup>マウメイ</sup>アルヲ, …『通俗醒世恒言』三・5・オ
- 5) カハル無情<sup>ムジャウテキ</sup>的<sup>コンシン</sup>ノ狠人<sup>コンジン</sup>(フトキヤツ), … 『通俗醒世恒言』三・35・ウ
- 6) … 例<sup>マヘ</sup>ノ前<sup>マヘ</sup>面的<sup>マヘ</sup>物事<sup>モノコト</sup>フラリト露出<sup>アラハレテ</sup>ケレバ。『通俗醉菩提全伝』三・9・オ

b. 装定・連用用法：「-的」ニ

- 1) 頭上<sup>カウベ</sup>ノ金釵<sup>キンサイ</sup>(キンノカンザシ), 簾鉤<sup>レンカウ</sup>(ミスノカギ)ニカハリテ, 當<sup>トウテキ</sup>的(チント)ニ響<sup>ヒキ</sup>キテ落<sup>オチ</sup>ケレバ … 『通俗隋煬帝外史』一・12・ウ



- 2) ロク掩テ格<sup>カクテキ</sup>的(クツノト)ニ笑<sup>ワラ</sup>フテ曰、 … 『通俗赤繩奇縁』一・9・ウ
- 3) 香々<sup>カウノヘテキ</sup>的<sup>カユ</sup>ニ粥<sup>ニ</sup>兒<sup>キツ</sup>ヲ煮<sup>キツ</sup>テ喫セヨ。 『通俗醒世恒言』二・13・ウ
- c. 述定用法：「-的」ナル
- 1) 執<sup>シツセイテキ</sup>性的(ヘンクツ)ナラバ、 … 『通俗醒世恒言』四・3・オ
- d. その他・名詞用法：「-的」
- 1) 我家<sup>カ</sup>ニ三四個<sup>コ</sup>ノ養女<sup>ヤウヂヨ</sup>(ムスメブン)アレトモ、俱<sup>トモ</sup>ニ出色<sup>シヨツシヨクテキ</sup>的(スグレモノ)ナシ。 『通俗赤繩奇縁』一・5・オ
- 2) コノ賣<sup>バイユテキ</sup>油的<sup>カ</sup>ハ秦氏<sup>シ</sup>ナリト云ヘバ、 … 『通俗赤繩奇縁』二・6・オ
- 3) イツレノ管<sup>クワンモンテキ</sup>門<sup>カ</sup>的(モンノヤクニシ)ナリトモ、 … 『通俗醒世恒言』一・4・オ
- 4) 做<sup>サ</sup>公<sup>コウ</sup>的(ヤクニシ)ニ看<sup>ミ</sup>ツケラレ、 … 『通俗醒世恒言』三・8・オ

また、『古語大辞典』<sup>10)</sup>は「-的」を江戸時代、享保(1716)から宝暦(1764)にかけての中国俗語小説の流行によって、小説類に使用された語であると述べ、以下の(24)aのような用例をあげた。(24)aの「無文的」は、被修飾語である「漢」を修飾して、「無学である人・者」という意を表す。よって、統語論的に(15)aの装定・連体用法にあたると考えられる。一方、同じ語である(15)bの場合は、「無学である」という意を以て終止用法として使われているため、(15)dの述定用法だと考えられる。

(24) a. その客衆を無文的<sup>ムモンテキ</sup>の漢(かん=一文ナシノ男)<sup>11)</sup>と、友達とささやいてあざける故 『浮・鎌倉諸芸袖日記・四』寛保3年(1743)

b. 此医者<sup>シ</sup>はなほだ無文的<sup>ムモンテキ</sup>の(ムモンテキ)こて<sup>コ</sup>飴といふ字を鉦とあやまり  
談義本・医者談義・五「医者発不発之談義」(1759)

凡例) aの『古語大辞典』には、無文的の漢に「一文ナシノ男」という注釈があるが、『日本国語大辞典』(第2版)によると、無文的は「[形動] 文字を知らないさま。無学なさま」だという。

10) 『古語大辞典』小学館、1983

11) 「無文的」における「無文」は「文盲」に類する「文字知ラズ」であって、「無文的の漢」は「文字知ラズ者」の義になる(堀口1992:60)。

ちなみに、前田(1960)も近世における「-的」の用例を以下の(25)のようにあげたが、(25)における「-的」の意味機能はそれぞれ、幸的(幸次郎)、猿てき(猿坂)、源てき(源七)、嫉てき(嫉妬)である(前田1960:81)。それは、(25)の「-的」の用法自体はすべて名詞用法、つまり、(15)cのその他・名詞用法であることを意味する。しかし、(25)d「嫉てき」の場合、(15)のような認識・解釈によると、(15)aのその他・名詞用法でありながら、同時に(15)dの述定用法でもある。

- (25) a. お前が幸的を誉めるなア、良人にしたのだから当然だが  
『花鳥風月』四編・上、弘化元年作カ(1844)
- b. 猿てきが意地にかかって帰らないのさ  
『春色恋酒染分解』初編・中、万延元年刊(1860)
- c. 油は源てきが振り零すし 『春色恋酒染分解』二編・下、万延元年刊(1860)
- d. それとも又要人さんが嫉てきで厳しくでも言ひなさるか  
『毬唄三人娘』三編・下、文久三年カ元治元年刊(1863・1864) 前田(1960:81)

以上の(22)~(25)のような近世和文にみえる「-的」の用法を総合し、統語論的に分類すると、以下の(26)のようになる。また、各用例における「-的」の語基を種類別にまとめると、以下の(27)のようになる。

- (26) [近世和文における「-的」の用法]<sup>12)</sup> [「-的」の形式]
- a. 装定・連体用法：(22)a-2), (23)a 「-的」+ノ
- b. 装定・連用用法：(22)b, (23)b 「-的」+ニ
- c. 述定用法：(23)c, (24)a・b, (25)d 「-的」+ナル・ト・ニテ・デ
- d. その他・名詞用法：(22)a-1), (23)d, (25)a・b・c 「-的」+ハ・ヲ・ガ

(27) [近世和文における「-的」の語基の品詞・単位]

a. 近世和文の「-的」の語基の品詞及び用例

12) (25)dの場合、「嫉てき」は「嫉妬をやく人、甚助」を意味して、「-的」自体はその他・名詞用法であるが、統語論的には「嫉てきダ」と見て述定用法だと判断する。また、(22)a-2)の「我的」も同様にその他・名詞用法ではなく、装定・連体用法だと判断する。

- 1) 体言：1-1) 名詞：中年的, 車力テキ 1-2) 代名詞：我的, 你的
  - 2) 用言
    - 2-1) 形容詞・形容動詞：出色的, 無情的
    - 2-2) 動詞：賣油的, 出名的                      2-3) 副詞：當的, 格<sup>トウ</sup>的, 遠々<sup>カクテキ</sup>的
  - 3) その他：3-1) 感動詞：噹的
- b. 近世和文の「-的」の語基の単位及び用例
- 1) 語：我的, 無情的
  - 2) 連語・句：不三不四<sup>フサンフシ</sup>的(慣用句)

つまり、以上の(26)と(27)のように、近世和文の「-的」の用法は、近世日本における中国俗語文学の「-的」の用法に対する統語論的な認識・解釈(15)を基盤として導入されたと思われる。しかし、中国俗語文学とは異なって、和文では「-的」のみでその意味と機能(e.g. 装定用法・述定用法)を表すことは容易ではなかったと思われる。よって、「-的」に文法表示として送り仮名(ノ・カ、ニ、ナル・ト・デ等々)を付することによって日本語化したと判断する。またその際に、形態論的にも「多様な品詞+的」といった(10)の中国俗語文学の語構成を借用したと考えられ、和文においても(27)のように、さらに多様な品詞と単位の語を語基として許容していた。例えば、近世和文では「你」「出名」「出色」のような中国語の語基をそのまま借用するなど、中国俗語文学の「-的」の語構成を踏襲していながらも、同時に形容動詞・感動詞など、語基の拡張も行われた。言いかえると、(9)の中国俗語文学の「-的」の用法が日本語に導入されるに際して、3.2.1節で言及した(15)dと(26)cの述定用法の成立以外に、その語基における拡張も同時に行われたことになる。

### 3.2.2.1 中国俗語文学と近世和文における「その他・名詞用法」

ところで、(9)の中国俗語文学の「-的」の用法と(26)のような近世和文の「-的」の用法の間には、他にもう一つの変化或は相違が存在するが、それはその他・名詞用法における「的」の意味とその語基に関連するものである。

まず中国俗語文学の「-的」のその他・名詞用法、例えば、「村的(田舎っばい人≡田舎者<sup>13)</sup>)」「間氣的(うつけもの)、前田(1960)」「姓花名約的(名字が花

で名前が約である人)」「(6)a「貴的(貴いもの)」等の用法はそれぞれ形容詞などに助詞の「的」が付されて「～である人・～である物」という名詞のように使われる用法である。また、『日本国語大辞典』における「唱的(歌う人≡芸者)」「控馬的(馬を操る人≡馬子)」と(6)e「送信的(手紙を配達する人郵便≡配達夫)」「(6)d「走的(歩くこと)」等の用例は、動詞などに「的」が付されて主に「～する人・～すること」という名詞のように使われる用法である。

ところが、このような中国俗語文学における「-的」のその他・名詞用法には、二通りの見方が可能だと稿者は考える。まず、堀口(1992:62)が「その下の名詞を省略した用法」だと述べたように((7)参照)、その他・名詞用法が、文脈或は「-的」の後部に被修飾語が想定されて省略された形だという見方である。簡単にいうと、被修飾語が省略された装定・連体用法の「-的」が、その他・名詞用法として認識されることである(e.g. 村的(人), 貴的(もの))。もう一つの可能な見方は、その他・名詞用法は、(3)eのように「-的」における「的」が体言ではない前接の中心語を体言化させる用法<sup>14)</sup>だというものである。これに関する判断には更なる考察が必要とされるが、両見解には少なくとも次の二点において共通している。まず、両方とも「的」が結果的に名詞のように扱われる「-的」を派生させる用法であること。また、その際に両者における「的」は、前者の場合は連体用法を派生させる助詞で、後者の場合は体

- 
- 13) a. 人名または人を表わす語、あるいはこれら的一部分(多くは、はじめの二音節)について、親愛の気持、または軽蔑の意をこめてその者を呼ぶのに用いる。中国の俗語で、「村的(いなか者)」「唱的(芸者)」「控馬的(馬子)」などの用法があり、これをまねたものという。江戸末期から明治にかけての俗語として用いられ、明治期(一八六八—一九一三)には、書生ことばや新聞の雑報欄の用語として使われ、香具師(やし)や盗人の隠語として、後にも引き継がれる。「幸的(幸次郎)」「土左的(土左衛門)」「官的(官員)」など。
- b. 名詞、特に抽象的な意味を表す漢語の名詞や体言的な語および句について、体言、または形容動詞語幹をつくる。中国の助詞の用法にならって明治初期の翻訳文のなかで、英語の-ticなどの形容動詞的な語の訳語として二字の漢語につけて用いられ出してから、学術的な文書などに多く用いられる。『日本国語大辞典』第2版(2001)
- 14) (3)e. 「的」構造になって、前の中心語を体言化するもの。 楊(2009:135)  
凡例)中国俗語文学の「的」構造とその中心語の関係は、日本語の「-的」とその語基の関係と同じ。

言化の接尾辞である。つまり、両者の「的」は自立できる体言ではないことである。

ちなみに、前田(1960)も、「や的」における「的」に関して考察しながら以下の(28)のように、中国俗語文学における「的」が代名詞或いは名詞ではないと述べている。

- (28) …… 確かに明治中期ごろ、人をさして「…的」ということが行われた。もっとも言葉じりをとらえるわけではないが、小阪(時雄-引用者)氏の「人をさして的と云った」とか「あの人をあのてきと云った風な」とかいう説明の仕方はまずい。少なくとも誤解をまねきやすい。その説明を字面通りにとると、その「的」は代名詞ないし名詞になる。… 中略 … しかし、「や的」の「的」は、それではなくて接尾語である。例えば明治十七年刊行『商業符牒神宝』(塚田中安治郎板行)なる一枚摺りに、新聞人用の隠語として挙げた中に「盗賊(ヲ)泥的」とあるこれであり、坪内逍遙の『当世書生氣質』(明治19年)の中に、「だから田の的が恋着するヨ。どうです、田の的を廃業してしまつて」(「田の的」とは芸妓「田の次」とあるこれである。前田(1960:80-81)

一方、以上のような中国俗語文学における「一的」のその他・名詞用法に対して、多くの日本の文献や辞書記述は、「人名または人を表す語<sup>15)</sup>」「明治中期ごろ人をさして的和と云った時代に(あの人をあのてきと云った風に)」<sup>16)</sup>「人名の一部を取つて、和を用いる」<sup>17)</sup>などと述べて、まるでその他・名詞用法の「的」がもっぱら人・人名を表す代名詞であるかのように記述している。

そこで、近世和文における実際の「一的」のその他・名詞用法をみると、(23)dのその他・名詞用法のように、それぞれ「優れ者」「油を売る人≡油商人」「門を管理する人≡門の役人」「公職に従事する人≡役人」の意になる。また、時期は下るが、以下の(29)のような用例もあげられる。前田(1960)はそれぞれの「一的」の用法が、「幸次郎」「猿坂」「源七」「嫉妬をやく人」の意である

15) 『日本国語大辞典』における「一的」に関する記述。本稿の脚注12参照。

16) 『露店考証』(1950)小阪時雄(前田1960:80)

17) 山田(1961:243)

と述べている。

- (29) a. お前が幸の誉めるなア、良人にしたのだから当然だが  
『花鳥風月』四編・上、弘化元年作カ(1844)
- b. 猿てきが意地にかかって帰らないのさ  
春色恋酒染分解』初編・中、万延元年刊(1860)
- c. 油は源てきが振り零すし 『春色恋酒染分解』二編・下、万延元年刊(1860)
- d. それとも又要人さんが嫉てきで厳しくでも言ひなさるか  
『毬唄三人娘』三編・下、文久三年カ元治元年刊(1863・1864) 前田(1960:81)

最後に参考としてあげるが、山田(1961)は、以下の(30)のような近代和文における「-的」の意味機能はそれぞれ「淫売婦」「土左衛門」「芸者」「官吏・官員」とであると述べた。

- (30) a. 偕こそ地獄的<sup>18)</sup>遁さぬと引捕へてお調べなさると  
『仮名読新聞』明治10年(1877)02月24日
- b. 何んにしろ並の土左的では無いといふ評判跡は明日委しく記し升  
『仮名読新聞』明治10年(1877)03月30日
- c. 芳町のニヤンの小仙は去月の下旬 『仮名読新聞』明治10年(1877)03月17日
- d. 誰か怪しむ官的的那翁鬚に擬するを 『東京日日新聞』明治11年(1878)11月16日  
山田(1961:242-243)

以上の(23)dと(29)の「-的」の用法は、いずれも近世和文におけるその他・名詞用法であるが、例えば、比較的時期が早い(23)d-2・3)の「賣油的」「管門的」とその後の(29)d「嫉てき」の場合、中国俗語文学と同様に、形容詞・動詞に助詞「的」が付いて「~する人」で、「油を売る人≡油商人」「門を管理する人≡門の役人」「嫉妬をやく人」のように解釈される。

18) 地獄的(ぢごてき)

一方、(23)d-1「出色的」と(29)a「幸的」b「猿てき」c「源てき」の場合、順番に「~である人」のように「優れた人」「幸次郎・幸さん」「源七・源さん」「土左衛門・土左さん」と解釈されると思われる。つまり、これらの用例は全て「~である人」の意だという点では共通している。しかし、中国語の色彩が強い語基を持つ「出色的」と他の「-的」の間には大きな相違が存在するが、それは前者の語基が形容動詞(用言)である一方、後者は固有名詞などを含む名詞(体言)である点である。前者の場合は中国俗語文学と同様に、体言ではない語基に「的」を付することによって、語基の属性を持つ体言のような「-的」が派生される用法である。しかし、後者の場合はその語基がすでに体言であるため、「的」はその語基を体言化する必要がない。よって、それぞれの「的」が直接に「次郎」「七」「衛門」という人を表せる名詞、或は人名・職名などに添えて敬意を表わす「~さん」のような接尾辞のように使われていると判断できる。また、後者の「-的」は、順番に「幸的人」「源てき人」「土左的人」のように解釈するより、「幸次郎・幸さん」「源七・源さん」「土左衛門・土左さん」のように解釈した方が自然だと思われる。

- (31) a. べらぼうに気の宜<sup>おほや</sup>家主<sup>かんぬし</sup>てきだのう 『七偏人』初偏・下、文久3年(1863)  
 b. 神<sup>かんぬし</sup>主<sup>し</sup>てきに談じこんで 同二編・上  
 c. 車<sup>しやりき</sup>力<sup>りき</sup>てきは骨がをれるもんだから 同五編・下  
 前田(1960:82)

よって、以上の(31)の「家主<sup>おほや</sup>てき」「神主<sup>かんぬし</sup>てき」「車力<sup>しやりき</sup>てき」の意味も、それぞれ「家主・家主さん」「神主・神主さん」「車力・車力さん」のようになると稿者は判断する。ちなみに前田(1960)も、明・清時代の「-的」は、単独実体名詞で、しかもそれ自身すでに人の意をもつ語に「的」を付けるというような用法はないと述べた。それは、すでに単独実体名詞或は人を表す語に、その他・名詞用法における体言化助詞の「的」は必要でないからである。

つまり、近世和文における「-的」のその他・名詞用法は、基本的には中国

俗語文学と同様に「～である人・～する人」という意を表していると判断されるが、その語基として固有名詞を含む名詞(体言)を許容するなど、中国俗語文学における「-的」とは異なる傾向であることが分かる。ちなみに、中国俗語文学において「人+的」のような用法は基本、所有を表す連体用法(e.g. (6)c 我的書(私の本))である。

また、管見の限り、中国俗語文学のその他・名詞用法の場合、「人を表す用法(～する人・～である人)」に加えて、「物・ことを表す用法(～すること・～である物)」も多く見られるが、近世和文の場合は「人を表す用法(その他・名詞用法)」に大きく傾いている。

以上のような中国俗語文学と近世和文のその他・名詞用法をめぐる相違の発生原因は、中国俗語文学の「-的」が日本語に受容される際にその語性が変わったからだと稿者は解釈する。

## 4. おわりに

本稿では、近世における「-的」の用法を中国俗語文学における用法と形態・統語論的に比較し、その影響と変遷過程に関して考察を行った。その結果、近世和文の「-的」の用法は、近世日本における中国俗語文学の「-的」の用法に対する統語論的な認識・解釈を基盤として導入されたことが分かった。ところが、「-的」を導入するに際して、以下のような変化が見られる。

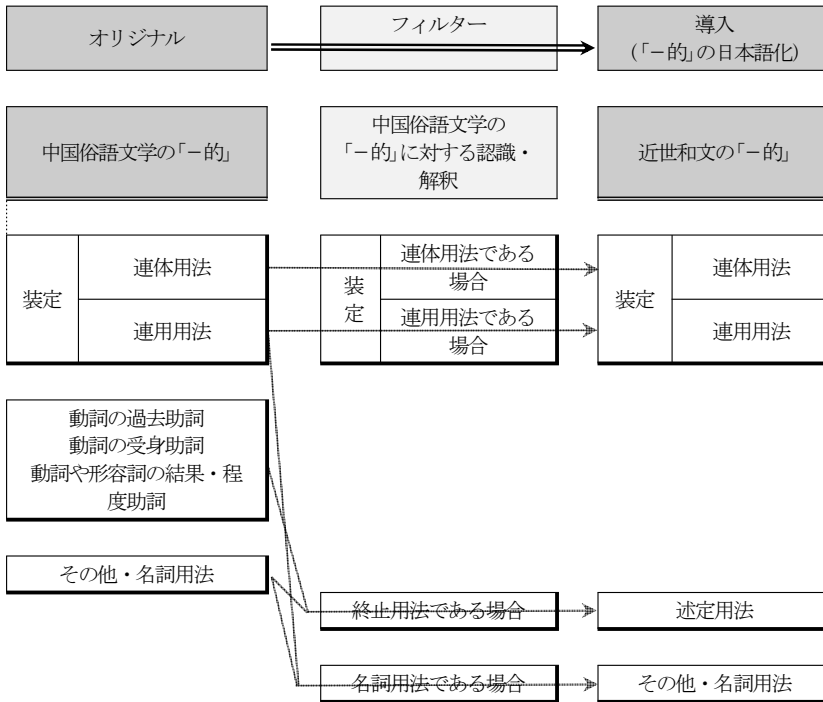
- 1) 近世日本では、中国俗語文学の「-的」自体の用法に加えて、述定用法のような文における統語論的な側面での「-的」の用法も、もう一つの用法として認識・解釈し、導入した。その結果、和文において述定用法が新しく見られるようになった。
- 2) 中国俗語文学とは異なって、和文では「-的」のみでその統語論的な意味と機能を表すことは容易ではなかったため、「-的」に文法表示として送り仮名を付することによって日本語化(導入)した。



- 3) その中で、近世和文における「-的」のその他・名詞用法は、基本的には中国俗語文学と同様に「~である人・~する人」という意を表しているが、その語基として固有名詞を含む名詞(体言)を許容するなど、中国俗語文学における「-的」とは異なる傾向が見られる。また、管見の限り、中国俗語文学のその他・名詞用法の場合、人を表す用法(~する人・~である人)に加えて、物・ことを表す用法(~すること・~である物)も多く見られるが、近世和文の場合は前者に大きく傾いている。

以上のような近世における中国俗語文学の「-的」の導入過程を簡単に表にすると以下の表1のようになる。

表1 近世日本語における中国俗語文学の「-的」の導入



【参考文献】

浅井真慧・深草耕太郎・坂本充(1997) 「「的を得た」は的を射ているか」第7回ことばのゆれ全国調査から②〜 『放送研究と調査』47(5), 日本放送協会放送文化研究所, pp.52-61

畔上道雄(1971) 「内村鑑三と畔上賢造」『思想の科学』119号, 思想の科学社, pp.72-87

磯邊彌一郎(1906) 「国文に及ぼせる英語の感化」『文章世界』1巻8号, 日本近代文学館, pp.5-15

遠藤織枝(1984) 「接尾語『的』の意味と用法」『日本語教育』53号, 東京大学国語国文学会, pp.125-138

- 大槻文彦著・鈴木広光校注(2002)『復軒雜纂1—国語学・国語国字問題編』平凡社(大槻文彦(1902)『復軒雜纂』の復刻版)
- 尾形侂解説(1976)『小説三言』:『小説奇言』(1753)
- 岡村真寿美(1998)「『五代史平話』の成立:『講史書』との関係」『中国文学論集』27号,九州大学中国文学会, pp.48-63
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 朱柏智(1991)「接尾語「一的」の歴史的研究—明治期を中心に—」『甲南女子大学大学院論叢』13号,「論叢」の会, pp.62-73
- 高橋勝忠(2005)「『的』論考」『英文学論叢』49号,京都女子大学英文学会, pp.1-22,
- 陳誼(1999)「日中両国語における「一的」について」『国語語彙史の研究 18』,国語語彙史研究会, pp.329-350
- 長澤規矩也解題(1974)『唐話辭書類集』第10集:『俗語解』長澤規矩也氏蔵本・第三冊(自ソ至テ)
- 中村幸彦編(1985)『近世白話小説翻訳集』全13巻中,1巻:『通俗醉菩提全伝』天花藏主人著・碧玉江散人訳,宝暦9年(1759)・『通俗醒世帝外史』齊東野人編・贅世子訳,宝暦10年(1760)/2巻:『通俗赤繩奇縁』馮夢龍編・贅世子訳,宝暦11年(1761)/4巻:『通俗醒世恒言』馮夢龍編・石川雅望訳,寛政2年(1790)
- 広田栄太郎(1969)「的という語の発生」『近代訳語考』東京堂出版 pp.281-303
- 黄冬柏(1996)「西廂故事の戯曲化について:金・董解元『西廂記諸宮調』を中心として」『中国文学論集』25号,九州大学中国文学会, pp.73-90
- 藤居信雄(1957)「的という言葉」『言語生活』71号,筑摩書房, pp.71-76
- \_\_\_\_\_ (1961)「的の意味」『言語生活』119号,筑摩書房, pp.80-83
- 堀口和吉(1992)「助詞「一的」の受容」『山邊道』第36号,天理大学国文学研究室, pp.59-76
- 前田勇(1960)「『てきや』という語」『言語生活』100号,筑摩書房, pp.79-83
- 松井利彦(1987)「漢語の近世と近代」『日本語学』第6巻・第2号,明治書院, pp.25-36
- 松本萬年(1878)『新橋雜記』1・2編,東京:稲田政吉,大阪府立中之島図書館蔵
- 水野義道(1987)「漢語系接辞の機能」『日本語学』第6巻・第2号,明治書院, pp.60-69
- 三宅邦(橘園三宅)口授(1817)『助語審象』巻之下,菱屋孫兵衛(京都御幸町御池通下ル),早稲田大学古典籍総合データベース(請求記号:ホ04 00057)
- 山下喜代(1999)「字音接尾辞「的」について」『日本語研究と日本語教育』森田良行教授古希記念論文集刊行会,明治書院, pp.24-38
- \_\_\_\_\_ (2000)「漢語系接尾辞の語形成と助詞化—「的」を中心にして」『日本語学』19巻13号,明治書院, pp.52-64
- 山田巖(1961)「発生期における的ということば」『言語生活』120,筑摩書房, pp.56-61
- 楊超時(2009)「日本語の「一的」と中国語の“~的”について—通時的観点からの一考察—

- 『外国語研究』第10号, 大東文化大学大学院外国語学研究科, pp.129-144
- 吉川幸次郎他(1979-1981)『漢語文典叢書』全6卷中1卷:『訂校・訓譯示蒙』明治14年(1881)
- 李秀卿(1998)「明治・大正期の「-的」の性格 -形容動詞化機能の定着過程-」『文学研究論集』9号, 明治大学大学院文学研究科, pp.11-29
- 李長波(2006)「近世, 近代における「-的」の文体史的考察」『DYNAMIS』10号, 京都大学大学院人間・環境研究科, pp.68-89
- 廖小梅(1996)「「-的」語形の評価義試論」『専修国文』第58号, 専修大学国語国文学会, pp.73-89

---

---

◇투 고 일 : 2012. 06. 30  
◇심사개시 : 2012. 07. 06  
◇게재확정 : 2012. 08. 23

---

---

〈要旨〉

近世日本語における「一的」の用法の成立

—中国俗語文学の影響を中心に—

「一的」は、白話小説など中国俗語文学の影響によって近世末期から日本語に現れ始めたと言われている。そこで本論文では、中国俗語文学の「一的」の用法がどのように近世日本語の「一的」の用法に影響を与えたか、その具体的な様相を把握するために考察を行った。まず、近世・近代日本語にみえる実際の「一的」の用法における形態論的・統語論的な分類基準を中国俗語文学に投影させて、近世において中国俗語文学の「一的」をどのように認識・解釈したかに関して考察した。続いて、中国俗語文学における「一的」の用法がいかなるものであって、またその影響によって導入された「一的」はどのように変遷していたか通時的に考察した。

その結果、中国俗語文学の「一的」の用法に対する近世日本での統語論的な認識・解釈を基盤として「一的」が日本語に導入されたことが分かった。その際、近世和文には新しい用法が派生されたが、例えば中国俗語文学の「一的」の用法に加えて、述定用法のような文における統語論的な側面での「一的」の用法も、もう一つの用法として認識・解釈されて新しく見られるようになった。また、和文では「一的」のみでその統語論的な意味と機能を表すことは容易ではなかったため、「一的」に文法表示として送り仮名を付することによって日本語化(導入)した。またその際にして、「一的」の語基として固有名詞を含む名詞(体言)を許容するなど、その語基における拡張も同時に行われた。最後に、中国俗語文学のその他・名詞用法の場合に人を表す用法(～する人・～である人)に加えて、近世日本語の「一的」には物・ことを表す用法(～すること・～である物)が多く見られるなど、用法の傾向においても変化が見られて、「一的」の語性においても変化が行われたことが確認できた。